

特集 子ども参加の現場から

第3回 茅野市こども会議 開催



「子どもと大人は茅野市の未来をつくるパートナー」をキャッチフレーズに、未来の茅野市を担っていく子ども達の意見をまちづくりに取り入れるため、子どもたちの本音や考えていることの意見交換、大人たちへの意見、市政に対するアイデアや提言などを出し合い、自由に話し合う場として「第3回茅野市こども会議」を開催しました。

「こども会議」の実施主体としての「こども会議こども委員会」を年10回開催し、こども会議のテーマ決め・こども会議運営準備を行いました。「こども委員」については市内在住・在学の中高校生計28名から構成されました。

「こども委員会」では、大人の協力者として、ファシリテーター（進行役）とサポーター（支援者）が子ども達の声を引き出したり広げたりする役割を果たしました。

こども委員会では、ワークショップを取り入れた関係づくりを行い、意見交換のしやすい雰囲気づくりをしました。また、小グループに分かれて「自分の居場所」、「自分の大切なもの」

などを話し合いながら、子どもの権利や相手の意見を尊重することを学びました。

また、こども会議の先進地である川崎市の子ども会議子ども委員と交流するため、川崎市子ども夢パークに行きました。違う場所に住む同世代の子ども達の意見や考え方に触れることができ、またこども会議の進め方についても大いに参考になりました。

その後、数回のこども委員会で、こども会議本番で話し合うテーマを絞り込みました。茅野市こども会議本番では、「学校」「施設」「生活・環境」の3つのテーマについて、こども委員・当日参加の子どもたちを交えた小グループで意見交換をした後、こども委員が各グループの意見を発表しましたが、時間が足りないほど多くの意見が出されました。それをもとに、会場全体の子どもと大人が意見交換をすることで、テーマについて議論を深めることができました。当日の参加者は、子ども・大人合わせて150名ほどで、せっかく良い意見交換

NEWSLETTER No.103 CONTENTS

特集 子ども参加の現場から

- 第3回茅野市子ども会議開催 /1
- ストリートアウトリーチの現場から /3
- ミニいけぶくろは、子どもによる子どものためのまち /5
- 資料：ひろがるこどものまち /6
- 「はこ」－仙台のびすく泉中央4プラ /7

- 中野ハイティーン会議発表会 /8
- 江戸川子どもの虐待防止キャンペーン報告 /9
- 市民活動の「初めの一步」 第5回**
- NPO法人 子どもの権利支援センター「ばれっと」 /11
- 本の紹介**
- 子どもの権利条約ガイドブック /12

だったので、もっと大勢の参加者に参加してもらったり聞いてもらえればと思いました。

「こども会議」で出された意見を、「こども委員会」で集約し、市に提言書を提出しました。

提言 1 学校の生活について、先生と生徒とが話し合い、お互いの気持ちを聞きあえる場を作る。

提言 2 環境を守る活動の機会とPRの機会を増やし、ゴミの

ない茅野市を目指す。

提言 3 こども会議を今後とも継続していくこと。

今後は、①こども委員に継続性を持たせる、②こども委員によるこども会議の企画・運営、③地元で継続して関わってもらえるサポーターの養成、④こども会議本番参加者の増員などをさらに進めていくことが課題であります。

(市職員)

参加者の声

こども会議をとおして一スタッフの立場から

私は第2回のこども会議から関わってきましたが、今回も学校から推薦されて来た中高生達は、受け身の姿勢でなかなか意見が出ず、大人どころか子ども同士でも打ち解けることなく、苦しい思いをしました。私達職員には、できる限り子どもの自主性を尊重したいという気持ちがありましたが、それがかえって子どもに丸投げすることになってしまい、子ども達は萎縮してしまっていたように思います。

ファシリテーターに入っていただいたおかげで、なかなか自分の考えをまとめられない子、考えを言えない子の後押しをしていただき、意見交換が活発に行えるようになりました。考えがまとまっていなくても、子どものほんの「つぶやき」を拾い上げ、それを膨らませることで、子ども達の本音が形となるプロセスを目の当たりにできたことは、子ども達の声を聞くうえで大変参考になりました。

また、行政が主導で行っているという点や、「会議」「委員会」という名称からして、どうしても堅苦しい部分が多くなってしまい、子ども達も相当固くなっていました。そこで、大人の支援者自らがやさしく子どもと同じ目線で接したり、話しやすい雰囲気作りをすることで、子ども達の心が開かれ、子どもも大人も楽しく会を進めることができたと思います。

子ども達の自主性を発揮させるためには、子ども達を尊重し、子ども達と同じ目線で接すること、自主性を発揮できる環境を整えてあげる大人がいることが大切であると感じました。

(市職員)



中学生 男子

この会議を通して思ったことは、大人の人達に子供の意見を伝えられる事は本当にいい事だと思いました。普段は、あまり大人にいいたい事とかは言えないけど、この会議では自分のいいたい意見がおもいきり言えてすごくスッキリしました。

本番の会議では、他校の人達と意見交換しましたが、その人達もたくさん思っていることを言ってくれてうれしかったし、BGMもあって本当に意見が伝えやすい会場でこれからも続けてやっていってもらいたいと思いました。

また、会場に来てくれる人を増やすためにも、もっと宣伝とかをたくさんやって、今以上の意見が会場から出るいいと思いました。(先生に来てもらう)



中学生 女子

やっていくうちに「私たちが大人に伝えなきゃ」という気持ちが強くなりました。

子ども委員会では自分の思っていることや考えていることを付箋に書き出すことで他の人と一緒に意見を共有できたのだと思います。

こども会議では3つのテーマについて、全く話したことの無い中学生や高校生と話し合ってみて新しい意見が出てきたり、とてもおもしろいなあと思いました。また、大人からの意見も聞いて「ルールは何のためにあるのか」といったような違う方向から考えてみることも大切だと思いました。

サポーターの方や市役所の方、南雲先生がとても優しくして話しやすかったです。

ありがとうございました。



高校生 女子

最初ももっと重い雰囲気なのかな?とか思って、不安でした。けれど、年齢とか関係なく、とても楽しい感じで、思ったことなど自分の言いたいことを言える場になって良かったと思いました。

市について、自分たちが住んでいる街について、こんなに考えてみるのは、初めてかもしれません。知らなかったことが知れたり、意識するようになって、本当に良い経験になりました。

こども会議当日は、とても緊張しました。でも、みんな積極的に意見を言い合い、大人の思っていること、私たちが思っていることそれぞれ伝えられて良かったです。私もとても意見を言いやすかったです。

来年は、もっと色々な人に来てほしいと思いました。

今年は、そんなにいなかった気がします。あと、できるだけもっと多くの人の声が聞きたいと思いました。

このこども会議を通して、私は、前よりも、感じたことや思ったことを人に意見を言えるようになったと思います。そして、自分が住んでいる街を意識するようになりました。



ストリートアウトリーチの現場から

みくくす～ストリートアウトリーチサービス東京～ まる



カナダのアウトリーチワーカー



日本で実践している私たちの写真



アウトリーチを行うサンシャイン60通り

私は、今、エイズ予防啓発活動の一貫で、中高生をメインターゲットにストリートアウトリーチをするスタッフです。本稿では、私たちがどうしてこういった活動をしているのかと実施している活動の一片を紹介させていただきたいと思います。

●どうしてこういった活動をしているか ～若者に必要な情報、サービスを届けたい

若者向けの事業や施設がたくさんあっても、本当にそれが必要としている人に届かないことがあります。今の中高生もうちらの時代も、何かがあって情報にアクセスしたい/何か行動したい時、入り口が見当たらない状況は、変わっていないようです。支援の入り口になりそうだとされている周りにいる大人や、施設、機関等は、若者からは信頼されていなかったり、認識されていなかったりして、ほんのたまにしか機能しない状態が続いているようにお見受けしております。

このままでは、行動を起こそうとしている若者に、必要な情報やサービスが届かないのです。また、まだ行動を起こしていない若者の中には、自分に支援が必要であるかどうかかわからない、困ったけれど言い出せない状況もあります。特に、暴力の渦中にいたり、性のことで悩んでいたりと、なかなかまとまらなかったり、これって言うていいのかな、と思ったりしますよね。

だから、私たちは、誰かが何か困ったなと思った時、何か知りたい時、何かしたい時の入口、架け橋的役割を果たしたいと思ったのです。若者が必要とする情報の中で特に「性の情報」は、格別アクセスに難しさを感じましたので、まず重点的に取り組んで、4年が経ちました。ある学生に「スタッフは案内所の人って感じだね」と言われました。「私たちは専門家ではないけれど、色々なサービスへの架け橋位は作れるんじゃないか。」という当初の気持ちは、確信に変わってきています。

では、私達がしているアウトリーチ事業の紹介をしていきたいと思います。

●ストリートアウトリーチ ～もう、若者がいる場所に行っちゃえ！

モデルにしたのはカナダのStreet Outreach Serviceという団体の活動です。この団体以外にも事業のなかにアウトリーチを組み込む若者向け事業は少なくありませんでした。

「アウトリーチ」とは、施設で待っているのではなく、若者

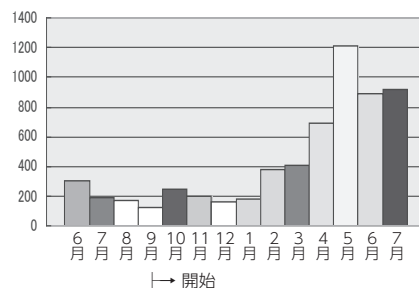
がいる場所に直接出向いて、情報提供や相談活動を行うことです。私たちは、まず若者がいる場所に出向いて、やりとりの中で関係性を築くことから始めています。性に関して情報が必要になってくる時期にしっかり情報を届けたかったので、大学生世代へはもちろん、中高生へのアプローチをメインに実施しています。

十代の若者向けコミュニティセンターのアウトリーチ事業では、週一回15時から20時に、繁華街に出向き、事業紹介のビラとお菓子（中高生に人気の飴やチョコを事前にリサーチ）を配布します。

話しかけた中高生の約1割が来館してくれています。当初は勉強する学生がまばらにいた程度でしたが、アウトリーチを始めて3ヶ月目には1日に30～50名の

中高生が来館するようになりました。

【アウトリーチを始めて来館者が増えた】



●アウトリーチ実践報告

①性の話をしないで（時にはして）性の話をする入り口を作る

「今、フリースペースの宣伝で、お菓子くばってんだけど」

そんな言葉から、アウトリーチは始まります。一人がざくばらん話をしたら、もう一人のスタッフは、「騒げる図書館みたいな、ちゃんとしたとこだよ。公共的な」とフォローします。そして、足を止めてくれそうだったら止まって、歩いていたら歩きながら話を続けます。ぴしっと制服を着ている子も着崩している子も、止まってくれたりくれなかったりします。

「8時位までやっている、ただでだらだらできる所なんだけど、トイレは広いよ」「あんまり売りはないけど、少しは漫画があったり、ネットができたりするよ」と、センターでできることをなるべく具体的に提示します。

また、彼らからの発言で以下のような会話がつながることがあります。

若者の発言	スタッフの発言
「通信制（高校）通ってかなり暇だから今度行くよ」	「まじか！（学校）近い？」
「気が向いたらー」	「気が向くようにいのってるわー」

「20時はアツい!! (20時までやっているのは便利、の意)」	「でしょー、それくらいしかウリないし(笑)」
「…おい、まてよう(話していたら友達に置いていかれる)」	「またねー、聞いてくれてありがとー」
「これって時給ですか、それともボランティアですか」	「いーとこ目つけんね。どうみえる?」
「ここってなんなの??」	「…長話になりますが、事業に関してちゃんと説明します。」
「あー!!! お前ら知ってる!! つかさ〇〇って△なの??」	「…性の話題の質問に答えることもあります」

こちらから彼らの情報を積極的に聞き出そうとはしませんが、こういった言葉をもらった時には日常的な話がつながっていきます。会話の中でお互いのテンションが掴める、そういった空気感を大切にしています。

②初めて会ってからお互いに話したり、お互いに情報提供をするまで

初来館時は、初めての場所に戸惑います。そこでスタッフは、「とりあえず入んなよ」と、椅子を引き、座る場所を提示します。そして、落ち着いたなそうだったら、わざとらしくならない程度に積極的に声をかけます。

「トランプあるよ」「落書き帳あるよ。落書きする?」「お茶とかのむ?」と、センターでできることを具体的に紹介します。こうして彼らは、センターに居ることに少しずつ慣れていきます。

慣れてくると、一人で、または、友達をひき連れて、頻繁に放課後立ち寄ってくれるようになります。来てくれた子はそれぞれ思い思いに時間をすごして、いつも笑わせてくれます。好きな芸能人、やな先生、友達といった場所、最近の流行語、髪の毛のセットのしかた、親、好きな歌、授業でなかったこと、最近見た映画、将来、地元、などに関する話を教えてくれることもあります。そういった会話を通して、初対面ではわからなかった彼らのストーリーがだんだん伝わってきます。(私たちは、最終的な出口は情報提供に据えながらも、それ以外の部分での会話を重要視しています。彼らのストーリーが見えてくることで、彼らにフィットした情報提供の仕方を、スタッフが理解できるからです。また、御幣を恐れずに言うと、その会話はとても楽しいものです。)逆に、彼らにも、一緒に過ごすに連れて、私たちが性のことに少しは詳しい人なんだな、ということが伝わっていきます。そして、やりとりの中で、彼らは「これを聞こうかな」と思ったり、スタッフは「この情報、支援が必要ではないかな」と思ったりして。一緒に過ごす中で、彼らに必要なタイミングで、自然な形で情報提供が起こります。

例) ある日、センターでトランプをしている5人組が、中絶をした友達の話から、自分たちの性行為、恋愛における人間関係の話題になり、「ゴムは毎回使えてないんだよね」「お前の彼氏は(殴るから)いいいづらくね?」と言っていました。

この会話を聞いているスタッフは、デートDV、性感染症、妊娠、緊急避妊等、その人に起こりうることに考えをめぐらせます。彼らとの会話から、さらに具体的な状況を聞かせてもらいます。会話に入って良い感じであれば、混ざることもあります。(うざくないことが重要です)そして、具体的なリスクやそれに対する対処方法について情報提供をします。その際、一方的に多くの情報を提供しないように

注意をします。話題によっては、集団に対する情報提供(一般的な知識としてみんなが身につけたら得すること)、個人に対する情報提供(個人の状況に合わせた状況整理やこれからどうするかを一緒に考えること)を分けてコミュニケーションする場合があります。

このようにして、若者との関係性を築きながら、彼らの状況を教えてもらい、その場に応じた個人支援を継続的に行っていきます。アウトリーチは、事業の中で、若者を必要な支援に繋げるための重要な入口として位置づいています。

●若者からの情報提供が企画になるまで：コンドームケースをデコっちゃう～

さて、いままで書いてきて、スタッフからの情報提供が見える形になったように思うのですが、若者から私たちへの情報提供もしょっちゅうあります。お互いに話し合う中で、私たちが知らない話を教えてくれます。その中で出来た企画が、「(コンドーム)ケースをデコっちゃう」です。最後に、この企画が出来るまでを紹介したいと思います。

センターにいる学生との話の中で、

「お財布に入れるとゴム破ちゃうみたいだけど、じゃあどこに入れればいいわけ?」

「親に鞆の中身を見られてゴムが入っているのがばれてすごい叱られた」

「ゴムを自分で持っているとか変だといわれる」

というような意見がありました。それで、どうしようかということで、何かに入れるといいよね、という話になったことがきっかけとなりました。

まず、どのような物に入れたらいいかケースが良いか、せっかくだったらデコってオリジナルにできるのでは?等と学生と相談して、一緒に材料調達をしました。その後、一緒に試作品を作ってみて、

「ここに売っているシールのほうが使いやすくて可愛いよ」

「このケースの厚みじゃあまりものが入らないね」

「コンドーム自体に抵抗がある人もいるから、コンドームケースという呼び方をしなくてもいいかも。まあ、そういう風にも使えるよ的なのが伝えられればいいんじゃないね」

等意見交換をしながら、試行錯誤をしました。最終的に、小物入れに適切なアルミ製の厚めの名刺ケースに、みんなで選んだシールを貼る企画になりました。

この企画を学生が集まっている場所で実施しているのですが、みんな思い思いのケースをデコレーションしていました。始めると結構凝って、時間をかける人も多かったのが印象的です。デコレーションしている時間はいろんな話が出来るので、そこから情報提供につながる事もありました。

その後、約500個のケースが出来上がっています。今ではいくつかの青少年施設で企画を行っています。



ミニいけぶくろは、 子どもによる子どものためのまち

原田 悠太郎 (ミニいけぶくろ議員・高校3年生)



フリマでは物を売ったり買ったり



ミニいけタクシー営業中！



探偵事務所では人探し！

このコンセプトのもとでミニいけぶくろ、通称“ミニいけ”は、もともとは地域のおとな達が子どものためにおこなっていたイベントが“子どものまち”になりました。“子どものまち”は第5回になります。“子どもによる子どものための”がモットーのため、小学生から高校生までの子どもたちが“ミニいけ議員”となり、それをボランティアスタッフのおとなたちがサポートしていくという形でイベントの企画と当日の運営が行われています。僕を含め小学生や中学生の頃からずっと携わっている人が年々増えています。受験があっても、終わるとまたミニいけに来ます。

例年ミニいけは、10～11月に中学生以上のスタッフ（＝ミニいけ議員）が集まって全体を通した企画の骨組みを作り、その後小学生のスタッフ（＝子ども店長）も公募して本格的には11～12月に始動します。最初は簡単なゲームや街探検を通じて打ち解け合いながら「ミニいけでこんなことをやったらどうだろう」をみんなで考えます。1～2月には具体的にどんなお店をやるか、などといった具体的な企画に入ります。また、本番に向けてチラシやミニいけの通貨（＝ハッピー）の製作もします（ちなみに僕はハッピーの製作作業があまりにも地道過ぎて毎年嘆きます）。3月になるとお店の看板や地図の作成など、最終的な作りこみをし、3月中旬に本番を迎えます。本番当日は毎年1000人近くの子どものたちがミニいけに参加します。こんなに多くの子どもたちが参加してくれると、議員や店長たち、おとなスタッフたちも嬉しい悲鳴です。するとやはりおとなの手助けが必要なのところも出てくるので、毎年おとなスタッフが人手不足になってしまいます。この記事を読んだおとなの皆さん！当日参加も大歓迎です。お手伝いよろしくお願いします！

さて、かれこれ僕は約5年間このミニいけに携わってきました。しかし正直なところ、毎年「今年はミニいけを成功させるぞ！」という意気込みはありますが、なぜミニいけにこれまで携わってきたかという明確な理由はよくわかりません。けれども企画を練ったり、当日の参加者と遊んだりしている中でミニいけに参加していて楽しいという気持ちはあります。「理由もなく参加していていいのかよ！」と突っ込まれるかも

しれませんが、ことミニいけにおいて、最終的に子どもたちが楽しいと感じればそれでいいのです。毎年そうですが、議員や店長には義務感となくて、好きな時に参加してOKで自由です。ダラッとしてちゃんとしてない雰囲気だから、肩に力が入らずに年齢の違う人達と自然に遊んだり話し合ったりできます。当日も当日参加の子どもたちだけでなく、議員として企画をつくってきた中学生以上の人たちや小学生店長もが、ミニいけで遊んで楽しんでいます。また議員や店長やおとなスタッフは、本番が終わってもパーティーや合宿などで、年間を通じて何となく集まっています。ですから僕は楽しいからという理由でミニいけに参加しています。

話は変わりますが、僕は中学生時代から教育に興味を持っています。というのも、現代の学力偏重の教育制度に疑問を感じていたからです。学力偏重主義は一方通行的であり、過度に現実的な考え方を植え付けてしまいます。結果的に発想力と独創性に乏しくなり、画一的な、いわゆる四角い頭の人間ができてしまうと僕は思います。極論を述べるなら、教育制度によって子どもたちの発想力や独創性を潰してしまっているというわけです。では、どうすればいいのか。僕は、その発想力や独創性を活かした教育をしていくべきだと考えます。実際、海外の国々では授業に議論などを取り入れ、自分の意見を自由に発する教育がしばしば行われています。なぜこのようなことを述べたかということ、ミニいけ議会がまさしくその“自分の意見を自由に発する”場所であるからです。企画から参加する子どもたちはミニいけ議員や子ども店長となり、それぞれが議員会議で自由な意見を出し合い、常識や現実には囚われないミニいけを作り上げています。例えばミニいけでは毎年、現実では有り得ないようなお店などが開店することもあります。そして今年は、僕が子ども議員最後の年ということで、ミニいけの2本立て計画を提案しました。昨年までは、一箇所だけで開催していたのですが、子ども議員に中高生が多くなってきたこともあって、中高生の居場所も会場にして、2週連続企画でやろうと提案しました。実現の方向に向けるにあたり多数の問題が発生し何回も話し合いましたが、現在は、2つのグループに分かれて企画し本番に向

けた準備をしています。今回の2本立て計画は僕が提案したのですが、このように突拍子もないような意見が出せるのもミニいけ企画の良い点だと思います。

最後に、子どもの立場からおとな、特に子どもをもつおとなの方々へ一言。子どもたちを子どもらしく育ててあげてください。例えば、最近は塾通いの子どもたちも増えてきています。また、幼少時からの英才教育も人気が出てきています。しかし、それは本当に子どものためになりますか？確かに、成長の過程で子どもに対しておとながある程度のルールを敷いてあげるべきだとは思いますが、そのルールの上に無理矢理子どもを乗せ、走らせてはいませんか？人間には人為的に育むことのできないものがあります。その中には子どものときにしか育めないものもあります。行き過ぎた英才教育などはその大切な時期を潰すことになりかねません。これは前述の学力偏重教育にも通じるところがあります。子どもは子どもらしく遊びながら学ぶのが本当の姿だと僕は考えます。その上でおとなや親が必要だと思うことを子どもに選択

肢として与えてあげればいいのではないのでしょうか。おとなたちは教育についてもっと深く考えていくべきだと僕は思います。

今年のミニいけは3月13日、3月20日にそれぞれ豊島区立池袋第三小学校、ジャンプ東池袋で開催になります。ぜひ一度おとなの方も見学にいらしてください。



子どもまち代表からおとなの人たちへの見学の仕方説明

今、こどものまちが全国各地に広がっています。本格的な選挙で市長を決めるまち、民家で開催される小さなまち、50ものブース（お店）が連なるにぎやかなまち。それぞれのこどものまちに特色がありますが、どこも子どもが主役となって遊びのまちをつくっています。そして大人は自らの役割とは何かを葛藤しながら、そっと子ども達を見守り、支えつつ、自分達も楽しめます。そんなこどものまちに関心のある方は、下記を参考にぜひこどものまちを訪問してみてください。また、8月17～24日にはミニ京都&第4回こどものまち全国会議が開催されます。詳しくは「こどもがつくるまち研究会」非公式HP（<http://asobinomachi.jp/>）をご覧ください。

こどものまちの名称	開催地	開催時期	開催日数	主催
ミニさっぽろ	北海道札幌市	9～10月	2日	ミニさっぽろ実行委員会
仙台こどものまち	宮城県仙台市	10月	1日	こども未来フォーラム
ピノキオマルシェ	千葉県柏市	10月	2日	ピノキオプロジェクト実行委員会
ミニさくら	千葉県佐倉市	3月	4日	任意団体「NPO子どものまち」
ミニいちかわ	千葉県市川市	9～10月	2日×2会場	NPO法人市川子ども文化ステーション
キッズハッピーよこ丁	東京都台東区	12月、3月	1日	台東区立池之端児童館
むさしのミニタウン	東京都武蔵野市	3月	2日	子どもの参画をすすめる会
ミニたちかわ	東京都立川市	11月	3日	NPO法人こどもと文化協議会・プラッツ
ミニたまゆり	神奈川県川崎市	2月	3日	田園調布学園大学
ミニヨコハマシティ	神奈川県横浜市	3月	3日	NPO法人 ミニシティ・プラス
なごみん横丁	愛知県岡崎市	8月	5日	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
ピンポン横丁	愛知県名古屋市	3月	2～4日	NPO法人こどもNPO
だがねランド	愛知県名古屋市	7～8月	ほぼ1ヶ月	名古屋都市センター
キッズタウンなかむら	愛知県名古屋市	12月	2日	NPO法人子ども&まちネット
こども四日市	三重県四日市市	11月	2日	こども四日市市プロジェクト、四日市市
チャキッズタウン	京都府京都市	11月	3日	京都市、(財)京都市ユースサービス協会
ミニ大阪	大阪府大阪市	5月	2日	NPO法人こども盆栽
ミニ☆大阪	大阪府堺市	3月	3日	ミニ☆大阪プロジェクト
ミニたからづか	兵庫県宝塚市	3月	2日	ミニたからづか実行委員会
こどものまち高砂	兵庫県高砂市	11月	1日	NPO法人高砂キッズ・スペース
とさっ子タウン	高知県高知市	2月	2日	とさっ子タウン実行委員会

※一覧表は「こどもがつくるまち研究会」非公式HP（<http://asobinomachi.jp/>）、全国のこどものまち事例を紹介した書籍「こどもがまちをつくる 遊びの都市-ミニ・ミュンヘンからのひろがり」（編著 木下 勇、卯月 盛夫、みえけんぞう 2010.4発行 萌文社）及び、こどものまち関係者からの情報提供により作成。

※開催時期等は過去の実績を元に掲載し、可能な限り関係者に確認をとっていますが、変更になる場合もあります。

※他にも、ミニまつぶし（埼玉県北葛飾郡松伏町）、ミニ草加（埼玉県草加市）、イツツ ア スモール CTB（千葉県千葉市）、キッズタウンいたばし（東京都板橋区）、未来ぼ〜ろ（富山県富山市）、羽島子どもの町（岐阜県羽島市）、ミニまほろば（奈良県橿原市）など、様々なこどものまちがあります。

「はこ」 — 仙台 のびすく泉中央4プラ —

あくまで私の考えですが、人は違う場所に行けばそれに合うように、或いはそれに影響され変わると思います。家で家族と接しているとき、学校で友達とお喋りしているとき、職員室で先生と相談しているとき、お店で店員さんと語り合っているとき。

私がよく行く、「のびすく泉中央4プラ」は、私にとって、“それ”であり“違う場所”であり、違う箱です。

「のびすく泉中央4プラ」は、中学生と高校生のフリースペースです。好きなように使っていていい教室のような。勉強したり雑談したり、ゲームしたって楽器の練習をしたっていい。そんな場所です。中・高生向けの児童館みたいなものです。

昨年の夏休み明け、私が加入するバンドが活動していたのが「4プラ」で、顔合わせのために行ったのが最初でした。学校や塾の先生ともまた違う、大人のスタッフさんがいて、中学生がゲームをしていて、私のバンドメンバーが楽器を持って集まっています。なんて説明していいかわからない、伝わりやすいような似た施設が思いつかないような場所でした。

いつの間にか、本来まったく接点のないであろう知り合いや友達ができました。学校も住む区も部活も学年も違う……。バンドの練習やミーティングのために行っていましたから、他の人と関わる機会もそんなになかったはずなのに。きっかけも覚えていないほど、いつの間にか。

私は元々人見知りをする性格ではありませんが、はじめて会う人に進んで声をかけたり挨拶をするような性格ではありませんでした。しかし、「のびすく泉中央4プラ」に行くようになり、会っていきなりは難しくても、挨拶をしたり仲良くおしゃべりするようになりました。学校の友達が見たら、首を傾げてしまうのではないかとまで思います。

私は、中高生・大人に「のびすく泉中央4プラ」を知ってもらいたいです。というのも、ここでは今の中高生のことがとてもよくわかるからです。受付カウンターに座り、ぼーっとしているだけでいい。それだけでよくわかってもらえるはずです。

「ねえねえ、〇〇さん。聞いてくださいよ!今日こんなことがあったんだよ!」

カウンターにいるみんなはこんな感じです。みんな何かを話しています。スタッフさんに。そしてスタッフさんが返してくれる。それは趣味の話であったり、恋愛相談であったり多種多様。でも共通して、みんな何かを話したい。

そして「のびすく泉中央4プラ」に来る子は、ツイッターではなく、ブログでもなく、インターネットではなく「のびすく泉中央4プラ」で、画面に向かってではなくスタッフさんに発信しています。

何を意図して会話しているかなんて、本当のことはわかりませんが、何かを発信したい中高生と、その手段としてののびすくのような場所を選択している中高生の存在を知ってほしいです。

私も中高生であり、何かを発信したいと思っている一員です。私の場合、発信したいことは「私」です。私が存在していることを少しでも多くの人に知って欲しい、覚えて欲しいというタイプです。これを例にすると、存在を確実に知ってもらいたいなら、人のたくさんいる街のど真ん中で、大声で自己紹介をすればいい。でも度胸がなくてそれができない……。度胸がなくてもできることは、インターネットで発信。きっとそんな人が世の中にたくさんいると思います。

発信の手段として、インターネットを選ぶ人と、人との対話を選ぶ人。私はやはり、人との対話を選ぶ人がいいなと思います。インターネットでプロフィールを登録しても、見る人がよっぽど興味を持って調べないかぎり存在しないものと同じです。記憶の片隅にも残らないでしょう。それよりも、街中が無理ならどこか小さな場所で、たくさんの人の前では無理なら一人の人に、自己紹介をする方が記憶に残るはずですよ。

だったら学校で友達とおしゃべりすればいいと思うかもしれませんが、私は「のびすく泉中央4プラ」のような形でなくても、そんな場所がもっとできればいいと思います。

話が一贯せずうまくまとめられませんが、書きたいことだけ書いてきました。新しい箱として、新しい選択肢として、「のびすく泉中央4プラ」のような場所が、今必要なものの一つなのではないでしょうか。

(仙台 高校生)



中野ハイティーン会議発表会

～サポーターの視点から～

吉川 恭平 (学生サポーター)



1月30日、中野区役所内の会議室にて、中野ハイティーン会議の発表会が行われました。

中野ハイティーン会議(以下、ハイティーン会議)とは、区内在住・在学の中高校生世代の子どもたちが日々の生活の中で、気になることや疑問に思うことから子どもたち自身でテーマを決め、必要に応じて関係機関への取材も交えながら、自分たちの決めたテーマについて、話し合い、考えていく会議です。最終回では、発表会を行い、活動を区民・区長・教育長に報告しています。

ハイティーン会議は、中野区の子ども参画推進事業として、2006年度から取り組みが始まり、これまで、「少年犯罪」、「いじめ」、「裁判員制度」、「教育」といったテーマを取り上げてきました。

今年度は、「東京都青少年健全育成条例」(以下、条例)をテーマに7月から活動をスタートし、月1、2回行われる会議では、資料や話し合いを通して条例及びその改正についての理解を深めるとともに、取材先を考え、東京都庁、日本雑誌協会といった関係機関に取材を行いました。取材に行った直後の会議では、振り返りを行い、取材を通して感じたこと、思ったことのシェアも行いました。また、最終回で行う発表会のプログラムも子どもたち自身で話し合い、自分たちが調べてきたこと、考えてきたことをどのような形で発表すれば、来場者に伝えるか話し合いました。そして、今年度は、自分たちの調べてきたことを「パワーポイントによる資料」と「オリジナルの台本での寸劇」の形で発表する第一部と、グループに分かれ、来場者とメンバーで意見交換を行う第二部の二部構成で行うことになりました。どのメンバーも自分たちが1年間かけて調べてきたことが来場者にどうやったら伝わるか一生懸命考え、本番に向けた準備をしていました。特に、パワーポイント班と寸劇班に分かれた後は、通常の会議に加え、自主的に集まり、準備を重ねていました。

発表会本番では、ハイティーン会議のメンバーの司会のもと、子どもたちは自分たちでつくったパワーポイントの資料を使って、「テーマを選んだ理由」、「東京都青少年健全育成条例とは何か?」、「各関係機関への取材結果」といった報告を



行いました。また、発表の中で、取材や調べたことをもとに子どもたちが考えた寸劇を上演しました。「都庁と雑誌協会の話し合いシュミレーション」や「うっかり不健全図書を見てしまった学生」、「不健全図書を買おうとする少年」といった条例の改正後をイメージしたオリジナルな寸劇です。さらに、発表の最後には、第二部の意見交換会につながるメンバーからの問題提起も行われました。パワーポイントと寸劇を苦心してつくった甲斐もあり、来場者の方々も子どもたちの発表を熱心に発表を聞いていました。

そして、休憩を挟んで第二部の意見交換会です。当日は、都議会議員、区議会議員といった方から、漫画家の方まで様々な背景をもった来場者の参加があったこともあり、メンバーとの活発な意見交換が行われていました。条例に対する賛成・反対、また調べていく中での葛藤などメンバーのリアルな思いを来場者に伝え、また来場者それぞれの条例に対する考えを聞くことができ、とても有意義な時間となりました。

私は、今回のハイティーン会議にサポーターとして関わる中で、子どもたちのもつ力を改めて実感しました。少しでも来場者にわかりやすいようにとパワーポイントの資料をつくるメンバー、寸劇でリハーサルにはなかったアドリブを入れて工夫するメンバー。メンバーの子どもたちが、それぞれがよりよい発表会にしようとする姿を見て、おとなの関わり方次第で子どもはもっと力を発揮できるのだなと思いました。また、子どもたちの個性は、本当に様々で、パソコンが得意な子もいれば、話し合いをまとめるのが上手な子もいます。子ども参加を支援するおとなは、子ども一人一人をみて、エンパワメントしていかなければなりません。ハイティーン会議では、そんな基本的なこと、しかし、とても大切なことを私に、再認識させてくれました。

ハイティーン会議では、子どもの権利条約第12条で述べられている「子どもの意見表明権」をどのように保障していけばよいか、その実践を肌で感じることができました。今後、このような取り組みが広まっていくことが、子どもの権利の普及・促進につながっていくのではないのでしょうか。

江戸川子どもの虐待防止キャンペーン報告

荒田 直輝 (プレイソーシャルワーカー)

1. 児童虐待防止に子どもの声を活かしてほしい～子ども・若者からのメッセージ

私たちは、2010年1月に東京都江戸川区で起きた児童虐待死亡事件をきっかけに集まった「チームあさって」です。この1年、プレイソーシャルワーカーの荒田直輝さん、江戸川子どもおんぶずのメンバーと『江戸川子どもの虐待防止キャンペーン』を進めてきました。

江戸川区で起きた事件では、児童虐待を受けていた7歳の子がSOSを出し、担任の先生や校長先生、子ども家庭支援センター、児童相談所が動いていましたが、両親への対応はあったものの、子どもの視点に立った救済がされず、最悪の結果を生みました。このことは大きく報道され、私たちはもちろん、地域の子どもたちも知ることになりました。

私たちは、子どもの声を大切にできなかったことがこの結果を引き起こしたと感じ、世の中の人々が、もっと子どもの声を聴くようになってほしいと思うようになりました。そのためには、まず、私たちが子どもの声を聴くことから始めよう！と考え、18歳までの人にアンケートを実施しました。「遊びながらヒアリング」という手法を開発して、冒険遊び場で挑戦し、率直な本音を聴いたりもしました。

アンケートの質問項目は3つです（自由回答）。

質問1. あなたが困ったときに相談するのはどこですか？
（ない場合は、ないとお書きください）

質問2. もし「虐待を受けているかもしれない…」という子がいたら、あなたには何ができるとおもいますか？

質問3. あなたや友だちが「しあわせ」と感じるまににするためには、どうしたらいいと思いますか？

質問文は議論を重ねて作りました。例えば質問3の「しあわせ」という言葉も、「ハッピー」「楽しい」「うれしい」「ゴミのない」など候補を挙げて、言葉の意味やイメージが伝えたい内容と合うか、たくさんの時間を使って、真剣に慎重に考えました。

回答は、全国から1,023通の「生の子どもの声」が寄せられました。主に高校生で、江戸川区・都内のほか1都1道11県という広範囲から、FAX、メール、郵送などで集まりました。

質問1では「場所」を問うたのですが、「友だち」「家族」という「人」を指す回答が多かったです。質問2では「わからない」という回答はとても低く、みな、何かしらのアイデアを寄せてくれました。自分が行動するという内容の回答が多かったです。質問3では本当にいろいろな答えが見られました。何が「しあわせ」なのかは、その子に聴かなければわからないということがわかりました。

アンケート以外にも、た〜くさんのことをやってきました。児童虐待の勉強会を自分たちで開いたり、オレンジリボンの

イベント参加、児童相談所や子ども家庭支援センターの見学、事件の初公判の裁判傍聴、キャンペーン報告シンポジウムの開催、日本子ども虐待防止学会での発表（熊本）、「このとり」のゆりかご」を調査研究した熊本高校との交流、江戸川区長との面談、東京3弁護士会主催の子どもの権利シンポジウムへの登壇…などなど。

その間、チームあさってのメンバーも増えました。

私たちの活動の拠点は「松江の家」というところです。江戸川区松江地区にある築30年ほどの一軒家です。とっても居心地がよくて、座卓のそばでじっくり議論に参加したり、少し離れたソファに座って聴いたりしています。議論に煮つめると、気分転換にピアノを弾いたり、「さをり織り」をして今の気持ちを織りに込めたりします。ここは私たちの拠点であり居場所です。メンバーは、住む地域、年齢、学校などさまざまですが、ここがあったことでチームとしてまとまってきました。

現在は、児童虐待防止はもちろん、多様な機会に子どもの声が聴かれ、反映されるよう、訴えを続けています。児童虐待が少しでも減っていくように、多くの人々が、少しずつでも、子どもの視点から児童虐待について考えてほしいです。また、さまざまな社会問題について、子ども・若者が考え、声を挙げられ、それを聴いてもらえる社会になっていったらいいなと思っています。



松江の家での会議風景。自由な雰囲気の中にお菓子が並ぶ。

ちょうどいま、国連が定める国際ユース年です。テーマの「対話と相互理解」は私たちの目標とする社会と同じです。私たちの取り組みを何らかの形で報告しようと計画中です。

※チームあさって活動記録書「冒険の書」を千円で頒布中です。自分たちの言葉でガッツリまとめました。売上は交通費や会議費などに大切にに使わせていただいています。お申込みはWEB「江戸川子どもの虐待防止キャンペーン」まで
<http://edogawa-campaign.cocolog-nifty.com/blog/2010/11/post-efa2.html>

(文：チームあさって佐藤、山本)

2. 児童虐待防止における子ども・若者の参加とプレイソーシャルワーク

『江戸川子どもの虐待防止キャンペーン』の特徴は、児童虐待防止に、子ども・若者が主体となって活動してきたことにあるといえます。亡くなった子どもを悼む思いが、何か自分でも動きたいと思わせ、実際の行動へと移させました。

しかし、住む地域、年齢、学校も違い、出会ったばかりの者同士が活動を展開していくには、サポートも要しました。今回のキャンペーンでは、子ども・若者グループ「チームあさって」と事業運営を担った「江戸川子どもおんぶず」に私が入り、「プレイソーシャルワーク」という技法を活用することで、それぞれが独立しながら、持ち味を発揮した動きができました。

プレイソーシャルワークとは、私が以前、冒険遊び場で勤務した経験とソーシャルワークの専門性を融合させて作った手法です。特徴は、①「遊び」が持っている主体性、自発性に注目し、子どもへアプローチする。②子ども・若者と社会をつなぐ（参加・参画）ための直接・間接的支援を行う、の2点です。①とは、居心地のよい自由で楽しい雰囲気を作る／どんな意見も傾聴し、肯定的に受け止める／出欠も出入りも強制しない／団体扱いせず一人ひとりを個別化して捉えることを指します。自分の気持ちを開放し、それが受け止められる実感を持つことで、自らが権利の主体者であることの自認につなげます。②は、子ども・若者から出た「やってみたい」気持ちを支援していくことです。キーワードは「即時性」と「専門性」です。即時性とは、要望に素早く反応することです。子ども・若者の気持ちは大人とは違い、持続するとは限りません。興味や関心は絶えず変化します。気持ちが冷めてしまう前に、投げかけに誠実に応答することが肝心です。一方、専門性とは、事業を進めていく過程で生じた疑問に対し、子どもだからといって伝える内容を制限したり安易なものに置き換えることなく、専門的な知識や社会の現状に関する情報に触れられるようにすることです。文献や映像ではなく、施設を訪ね、本職の方から話を聴き、本物の体験をすることを含みます。実際に、メンバーと一緒に児童相談所や裁判の傍聴などに出向きました。

キャンペーンをととしてチームあさっては、権利の自認と経験を重ね、それらが相互作用を繰り返すことにより、一人ひとりの自主性や主体性を育てていったと考えます。子ども・若者の意見を聴き、彼らとともに事業を進めていったことを振り返ると、児童虐待防止の分野においても「子どもの参加」に可能性を強く感じます。

世界的にみても、児童虐待への子どもの参加は進められています。イギリスにおいては、2000年に起きた「ヴィクトリア虐待死亡事件」をきっかけに、子ども政策が大きく転換しました。事件の検証調査により、情報共有と連携が機能していない、子どもの声を聴くことが社会においてシステム化されていないなどの課題が明確になり、現在では、児童虐待防止のさまざまなステージで子どもの意見が聴かれるようになりました。また、今年2月には、国連子どもの権利委員会から、子どもの権利条約第19条（虐待・放任からの保護）に関する一般意見（General Comment）が発表されましたが、注目すべきは、関連する条文として第12条（意見表明権）が挙げられていることです。委員会は「子どもの参加は子どもの保護を促進し、子どもの保護は子どもの参加の鍵となる」と児童虐待からの保護と子どもの参加の関連性を強調しています。

日本では児童虐待問題は年々深刻さを増し、各地で施策や仕組みが活発に行われています。しかし、残念ながら、実際に子どもの声が聴かれ、子どもが参加して進められる取り組みはまだありません。

児童虐待における当事者の子どもの参加の推進は、問題解決のパートナーとして子どもを位置づけることを促し、子どもの素直な気持ちに即した支援を可能にするでしょう。また、子どもの社会参加の視点で見ても、子どもの独創的でポジティブな価値観とアイデアが従来にはなかった解決策を生み出すきっかけとなることでしょう。子どものエネルギーは大人を動かし、強いては社会を変革していく原動力になるのではないのでしょうか。

解決の糸口が既存の手法だけではつかめない今日、子どもの声を重要なエビデンスとして位置づけ、広く子どもの参加を促進していくことは、現状を打開する大きな一助になると考えます。



2010年10月3日に築地本願寺で行った報告シンポジウム
ゲストに宮本みち子さんと川崎二三彦さんを招いた



日本子ども虐待防止学会

特定非営利活動法人 子どもの権利支援センター『ぱれっと』

明橋 大二 (ぱれっと 理事長)

ぱれっとは、当初、小杉町（現在は射水市）子どもの権利支援センター「ほっとスマイル」の運営団体として、平成15年に立ち上がり、同6月、NPO認証を受けた。

ここに至るには、二つの流れがあった。一つには、富山県西部に不登校の子ども居場所が必要と考えた人たちがいたことで、平成14年7月、設立準備委員会が立ち上げられた。大学教員、精神科医、不登校当事者団体主宰者、主任児童委員、フリースクール講師、病院ソーシャルワーカー、臨床心理士、弁護士などさまざまな職種の人々が参加しており、これがその後、NPOの母体となった。

もう一つは、小杉町で子どもの権利条例制定の動きがあったことで、これは小杉町長の公約であり、すでに町民ぐるみでの策定作業が進んでいた。

居場所設立準備委員会のメンバーであった明橋が、条例策定委員会の委員でもあったことから、子どもの権利を保障する具体的な実行機関として子どもの権利支援センターを立ち上げ、そこを不登校に限らず権利侵害を受けた子どもたちが、安心して仲間と出会える居場所にしたいという構想を町に提案した。

幸い、町長、教育長はじめ町民や議会の理解も得られ、平成15年4月、小杉町子どもの権利に関する条例の施行された後、同8月、小杉駅前に、小杉町子どもの権利支援センター「ほっとスマイル」がオープンした。小杉町からの委託を受け、NPO法人が運営する公設民営形式で、子どもの権利条例に基づく居場所としては、川崎市に続いて全国で二番目の開設であった。

当初は、居場所事業（月～土の9時～17時、火曜定休）と相談事業（毎週水曜カウンセラーが子どもや保護者の相談に応じる）を行っていたが、平成16年3月から、親の会を開始、平成17年8月からは、富山大学と協働で開発した新規相談掲示板の運用を開始。なかなか家の外に出られない子どもでも、全国どこからでもアクセスでき、また設計上の工夫により、一切の誹謗中傷を排除した、安心して利用できる掲示板として運用。平成18年には、日本経済新聞社の日経地域情報化大賞2006（インターネット協会賞）を受賞した。

居場所を利用した子どもの数は、開所以来平成23年1月までに、のべ9569人、大人数は、のべ3250人、相談掲示板に投稿された相談・回答は、平成23年2月時点で、青少年相談掲示板6,534件、親専用相談掲示板3,434件となっている。

当初は、居場所を運営するためのNPOとしてスタートしたぱれっとであったが、子どもの権利支援のためには、子どもの様々な困難に関わっていくことが必要と考え、平成18年度より、富山県（高岡児童相談所）から「家族再統合支援事業」を委託され、虐待などを受けた要保護児童の家族支援を行っている。さらに、子どもの権利条約を富山県全体に啓発するため、子どもの権利条約フォーラム2009 in とやまの開催を提案、県内の有志により実行委員会を組織し、理事長の明橋が、実

行委員長を務めた。また、平成22年度からは、子ども支援の裾野を広げるため、小学校1年生のためのパワーアップアドベンチャー（小学校1年生に自然体験を通して自己肯定感を育み、親は子育て談義により子育て支援を行う）、発達障がいに関する連続講座を開催。各理事がそれぞれの担当を持ち、全員の協力の下、事業を実施している。

最後に、いじめにあい不登校となった子どもが、ほっとスマイルに通うことで元気になっていったプロセスを、あるイベントで発表した、原稿の一部を、ここに引用したい。

「僕はとても不器用で何をするにも時間がかかり、人の2倍3倍の時間が必要だった。よく教室の後ろに立たされ、先生から「何故皆に出来る事があなたには出来ないの」と体を叩かれたこともあった。「あなたの様な子供は、私のクラスにいません」と言われた僕は、いつクラスからいらないと言われるかといつも緊張して心も体もビクツとする様になった。

しだいに友達の中でもバカと言われる様になった。自分の張り物にバカと書かれていた。トイレに閉じこめられたり、大切にしていた自分の本がトイレにビチャビチャで見つかったり、何度も先生に助けを求めていったけど駄目だった。そしていじめは、ますますエスカレートしていった。そして3年の2月、「あんな恐ろしい所へは行きたくない」と母さんに言った。

それからの僕は、体に力が入らず、起き上がる事も出来なくなった。自分の世界が180度変わってしまった。自分がこれからいったいどうなるのか不安でとても怖かった。僕は、笑う事も泣く事も出来なくなってしまった。こんな風にしか生きていけないのであったなら、死んだ方がましだと思った。

そんな僕が少しずつ元気を取り戻し未来に少し希望が持てるようになったのは僕の家族とほっとスマイルでした。

スタッフの男性は、初対面の僕に部屋を案内してくれて、「自分の好きなように楽しんでいいんだよ」といわれた。僕は、このままのあなたでいいんだよ、と言われた気持ちになった。

何よりここへ来て良かったと思える事は、僕に友達が出来た事でした。友達と色々話したり、思っていた事を言ったりするのが、嬉しくて仕方ありませんでした。ここにいていいよと言われて居場所が出来た僕は、生きていていいんだよと言ってもらえた気持ちがしました。僕に家以外の居場所と友達が出来た。それは生きる力と勇気と希望をもらった。

自分の未来に何の夢も、希望も無く、死んだ方がましだと思った僕でしたが、色々な人たちのお陰で生きる力をもらいました。

やがて自分も人の力になりたいと思えるようになりました。僕にも将来の夢が出来ました。

僕みたいに苦しんでいる人を一人でも多く助けられたら、幸せになる手伝いがしたいと思っています。」

ありのままの自分が認められ、安心して仲間と出会える居場所の存在が、いじめや人間関係に苦しむ今の子どもたちの支援に、どれだけ大切か、その意味をかみしめながら、今後も活動を続けてゆきたいと思う。（ぱれっとHP:<http://www.toyamav.net/~smile/>）

子どもの権利条約ガイドブック

子どもの権利条約総合研究所 編
発行 日本評論社／2011年3月刊
定価 2000円
B5判 152頁

【目次】

I そここが知りたい！子どもの権利条約

- なにが問われているか
- 家庭・福祉と子どもの権利
- 学校と子どもの権利
- 地域と子どもの権利
- 少年司法と子どもの権利
- 条約の足跡をたどる
- 条約の基礎知識

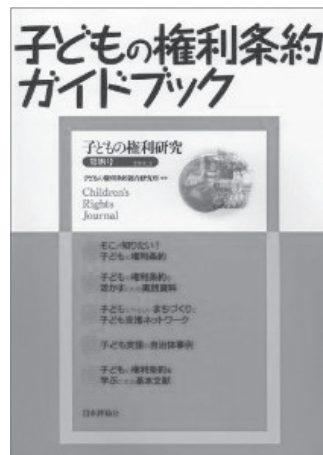
II 子どもの権利条約を活かすための実践資料 実践資料をどう生かすか

- 子どもが動く
- 地域が動く
- 国が動く

III 子どもにやさしいまちづくりと子ども支援のネットワーク ——「地方自治と子ども施策」全国自治体シンポ2010 in 白山

- 基調提案：ハッピー子育て—子どもと親の育ちを支える
真生会富山病院
- シンポジウム：子どもにやさしいまちづくりと子ども
支援のネットワーク
- 子ども支援施策の自治体事例
- 全体会Ⅱまとめ：国際社会・国・自治体による重層的
な子ども施策の展開

●子どもの権利条約を学ぶための基本文献一覧



【書評】

この『子どもの権利条約ガイドブック』は主な目的を子どもの権利条約の普及・啓発にしているだけあって、子どもの権利条約を学んでいくためにとても役立つ一書だと感じた。今まで条約になじみのなかった人が新たに学んだり、子どもの権利に疑問をもっている人たちの疑問を解決したりする手助けになってくれるのではないだろうか。特に、(掲載の目次からさらに) 具体的かつ実践的なトピックに細かく分かれているので、子どもの権利と聞いてつかみどころのないイメージをもっている人たちに、そのイメージを明確にするのにとっても効果的だと思う。

自分自身も、近年子どもの権利に対して世間の冷たい視線を感じることもあるなかで、投げかけられてくる疑問に対して明確な答えを学びなおすことができた。第一部では、条約の現代的意義、第二部では実践の中でつむぎだされた子どもの権利へのアプローチの社会的価値を感じることができ、子どもの権利条約を改めて学びなおす上でとても有意義なものであった。(NCRCスタッフ)

編集後記

東北関東大震災の犠牲になられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方に心からのお見舞いを申し上げます。

地震・津波・原子力発電事故等の何重苦をもたらししている大震災を受けて、人間はいかにもろい存在であるかを思い知り、多大な困難を抱えながら被災地で生き抜く人たちの姿やそれらの支援・復興に向けた取り組みのなかで人間のたくましさやあたたかさを感じながら、悲しみ・嘆き・怯え・怒り・安堵等の複雑な感情が交錯するなかで、生きる(生かされている)意味を問い続けている日々です。わたしたち一人ひとりができることは何か、「NCRCらしく」やるべきことやできることは何かを考えながら、微力ではありますが、着実に取り組んでいこうとしています。NCRCでは、被災者の支援や被災地の復興において子どもの権利という視点、特に条約の一般原則である差別の禁止、子どもの最善の利益の確保、いのちや成長の保障、子どもの意見の尊重や参加などが大切にされながら、緊急かつ総合的に取り組まれる必要があることをふまえて、人および情報のネットワークづくりをすすめていきたいと思っています。

課題は山積しています。特に親・家族を亡くした子どものケアや生活保障や家庭的環境の整備、障がいのある子ども、日本語が十分に話せない子ども、病気の子ども等に対する支援、子どもの居場所づくり、遊びや保育や学びの確保(場・物・時間・仲間・支援者等)、安心してつらい・助けてと言える窓口・手だての確保、当事者としての子どもの意見表明・参加支援、加えて子どもを支える親・家族の支援やコミュニティの再生の総合的な展開……。わたしたちは被災地の子どもたちやそれを支援している人たちの声をしっかり聴いて、子どもの権利の視点と方法をふまえた活動を息長くすすめていきます。(S・A)

「子どもの権利条約」No.103

2011年3月15日発行

★発行(季刊・年4回)

子どもの権利条約ネットワーク

Network for the Convention on the
Rights of the Child

〒152-0034 東京都目黒区緑が丘2-6-1

TEL&FAX 03-3724-5650

Eメール info@ncrc.jp

ホームページ <http://www.ncrc.jp/>

★発行人 喜多明人

★編集人 荒木悦子・南雲勇多

★年会費 5000円 学生 3000円

18歳未満 1000円

*郵便振替 00180-2-750150

★印刷 (株)第一プリント